

西真寺通信

令和四年夏号 発行 西真寺

●名著『甘えの構造』土居健郎
を読む

精神分析学者であり、精神科
医師である土居健郎の『甘えの
構造』は秀悦な名著です。

日本人による日本人論であ
り、「甘え」とは、全人類に共通
する感情ではありませんが、日本
語にしかありません。土居は、
日本人の甘えの根本には、依存
欲求の願望があり、ナルチシズ
ム的な甘えが発達したと指摘し
ています。その甘えの構造の中
心にあるのは、何でしょうか？

土居は、甘えのイデオロギー
について、天皇制を解し得るこ
とで、明らかにしています。

土居の説明では、天皇は、全
てにおいて、周囲の人間が手落
ちがないように取り仕切られる
身分であり、全て周囲に依存し
ている。

しかし、周囲は身分の上では、
天皇に従属している。つまり天
皇は、赤ん坊の状態であるにも
関わらず、身分は日本社会で最
高である。これは言い換えれば、
幼見的依存を体现している者こ
そが、日本社会では上に立つ資
格があることになる、というも
のです。

また、実際に伊藤博文は、憲
法政治の根本にキリスト教があ
り、天皇を中心とした家族国家
にすることで、人心を統一でき
ると創案したことも述べていま

す。そして、天皇制は、万人を
社会に出た頃、業務を下請けに
包摂すること、甘えを理想化し、
それを制度化したものであると
説明しています。故に「天皇は
日本国家の象徴である」と設け
たのはまことにふさわしいこと
であったと論じています。

また、私が新潟の寺に勤めてい
た時、荘厳、装束の準備や葬儀を
取り仕切るのは、私達助音(伴僧)
の仕事でありました。当初、全て
お膳立てしなければ成立しない構
造の真ん中にいる住職が、なぜ威
張れるのかが不思議でした。

「小天皇」とは誰のこととし
ようか。私がまだ思春期の頃、
テレビのブラウン管の中では、
出勤前の旦那さんの支度を手伝
う奥様がネクタイを結んであげ
たり、上着をかけてあげたりし
ていました。自分の事は自分で
しなさいと教育されていた年代
の私は、なぜ大人は許されるの
か不思議に思っておりました。

私は、甘えの構造の中に位置し、
同調の支配下で、同一化している
ことに気づかなかったのです。
常に他人事として捉え、構造の中
で同一化していることに慣れて
いる主体性の無さは、「甘え」その
ものではないでしょうか。現代文
明を担う私達は、自分を置き去り
にする「小天皇」に成り易き存在
なのではないでしょうか。

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」⑩
—親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争—

4. 親鸞聖人の神祇不拝

天武天皇の頃、古代日本に遡れば、仏教が伝わる前の神は、自然神のみでした。渡来系の民族が地方の豪族として君臨し、それと同時に中国から朝鮮半島に伝わった神話（天照も元は渡来人秦氏の祖神）を基に、権力者が都合よく編纂したのが『古事記』であり、『日本書紀』であることは既に周知の事実であります。また、その基本となった神もインドの神様群なのです。（七福神の弁天、毘沙門天、帝釈天など）
ここで権力者が統治に利用したのは、人間が純粹に持つ根本的な「聖なるものへの欲求」や「聖なるものへの衝動」に對してでした。人間の持つ純真な心に土足で入り込み、心をも支配

下に置く手法は、最も卑劣で姑息な、為政者が下す人権を無視する行為です。同じように明治政府はこの手法を使い、その後の戦争に発展した、命までも国に捧げなければならぬ排他的差別的な行為なのです。

**権力者の神格化 ←
人間の権利への侵害と人間を
利用し、騙す行為**

親鸞は、権力者が神を立て、それを利用しながら民衆を支配すること、もしくは排除すること、對しては、恥ずべき事傷むべき業（行い）として捉えていたのです。

親鸞は教行信証の中で、後鳥羽上皇による「承元の法難」について述べています。

ここをもって興福寺の学徒、
太上天皇諱尊成、今上諱

たかなり 尊成、今上諱為仁聖曆・承

げんひのと 元丁の卯の歳、仲春上旬

こう 候に奏達す。主上臣下、法

そむ 背き義に違し、忿を成し

うらみ 怨みを結ぶ。これに因つて、

こうりゆう 真宗興隆の大祖源空法師、な

もんとすはい らびに門徒数輩、罪科を考え

みだ ず、猥りがりがわしく死罪に

つみ 坐す。

歴史上、こうした権力者による民衆の心をも支配する断罪は、罪のない純粹に信仰を持つた人間を排除する残酷さの象徴であります。親鸞は、後鳥羽上皇は、五逆の罪に相当すると批判しています。（五逆…父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、仏身を傷つける、僧の和合を破る）

その後、後鳥羽上皇は、承久の乱で敗れ、隠岐の島に流されました。結果として、念仏者の首をはねた権力者は、念仏者として生涯を終えています。

親鸞が、後鳥羽上皇に對して念仏の法難の際に受けた深い傷は、決して対立や戦争を促す恨み節では無く、人間が最低限に与えられた権利、つまり「人格権」を主張するものです。

法然上人の弟子四人が死罪、法然と親鸞を含めた七人が流罪になりました。興福寺が主張した念仏弾圧と後鳥羽上皇の断罪は、現在日本国憲法で保障されている「宗教の自由」を奪う非人道的な行為であることは否定できません。

後鳥羽上皇は、この真実に目覚め、念仏者になったのだと私は思います。（次号に続く）

死刑制度と悪を考える⑦
親鸞の悪の捉え方 最終回

4・悪と自己愛

虐待連鎖は、虐待を受けた子どもが親になっても自分が受けた暴力を、自分の子に罪悪感なく行う世代間の連鎖の例として理解できるでしょう。

この暴力は、子どもの頃に親に暴力されても反撃できずにいたことから、大人になってから家庭内や職場で行ってしまう連鎖の悲劇です。

幼児期に受けた感情的恐喝による不安や屈辱的な傷は、その報復を果たすことで一時的な安心を得る事が出来るからです。

一時的であるからこそ、根本的な不安は無くなりません。故にその暴力は繰り返し行われる負の連鎖です。

この負の連鎖は、「渴愛」の心から生まれ、日本人特有の「甘えの構造」によって「理想的な自己像」を保持し、その自己像のものをさしに当てはまらない人間を排除する行為を繰り返してきた暴力であり攻撃です。

この暴力の連鎖は許されるものでしょうか？自分がひどい目にあつたから他人を同じ目にあわせることを妥当とする論理は日本独自の「甘えの構造」による攻撃にすぎません。

殺人事件をおこした人の多くは、親から暴力を受けたり、育児放棄されたかつての被害者であり、健全な自己愛には恵まれなかった幼少時期を過ごしています。

この「甘えの構造」の攻撃は、加害者と対立する側にいるはずの人にも指摘されます。なぜなら被害者意識と同一化し、加害者を積極的に攻撃することで充実感と連帯性を持つ幼い頃、

母親に甘えられなかった人に芽吹く社会的な行動だからです。

いじめが市民権を得て黙認されてきた社会性は「村八分」や全体主義に象徴されるように、組織の秩序を乱すものは容赦なく打たれるという美徳化された連帯感として認められます。「出る杭は打たれる」組織によるいじめの暴力の根本である渴愛の心、すなわち自己愛の不健全さによる連帯性は、人も社会も特有の構造をもたらすのです。

この「甘えの構造」こそが日本を死刑制度の国として成立させていた元型ではないでしょうか

倉光修は、幼いころに母を亡くした釈迦、親鸞、明恵、道元などは、安定した愛着が得られずにいたが、これを諦観したことで、高

いスピリチュアルを育み、理想的なワーキングモデルになりえると述べています。ワーキングモデルとは、乳幼児期の養育者との愛着

関係を、成人後に他者との関係性を築く上で、重要な役割を担うことを意味します。また健全な自己愛を形成する上において大変重要な内的なはたらきなのです。

また、老松克博は、日本人の自己愛障害的傾向について、先の敗戦とその後の復興において、地に落ちた自尊心が高度経済成長によって蘇った一方、この自負は付け焼刃であり、「不安定で誇大な張りぼて的な自己像」として現れていると述べています。

これが過度で付和雷同的な傾向として流行やブランドに飛びつき、西洋に対する卑下とアジアに対する蔑視によく表現されていると説明しています。『自己愛障害の臨床』カトリン・アスパ―著 老松克博訳、2001年）

死刑制度に反対する多くの日本人が、付和雷同であり、被害者家族の報復感情に「同情」し、正義を立て理想とする自己像と同

一化します。しかし、遺族にとつて本当に必要な自己像とは、死刑執行以降、被害者遺族のその後の人生に必要な「共感」で生きる「理想的な自己像」であるはずで、一時的な「同情」より「共感」し、共に歩もうとする道は「不安定で誇大な張りぼて的な自己像」では歩めません。

6・恨みの連鎖は消えるのか？

法然上人は、お父さんを九歳の時に夜討にあつて殺されています。お父さんの時国は押領として悪党を取り締まる役割を担った官僚であつた為、土地を巡るもめ事を常に抱えていたそうです。

時国は、死に際に九歳の法然に対して、この恨みを自ら断ち切つて仏門に入れと云い残したといひます。法然上人の母親は渡来系の被差別の出身でありましたので、幼少期における不安や怨念は深く、我々の想像を遥かに超えたものです。

釈尊は、「恨みで恨みが消える事は無い。恨みは恨みを捨てることで消える。これが永遠の真理なのだ」(ダンマパダ五の意訳)と言いました。

法然上人は、渴愛からの解放、すなわち報復感情を乗り越えました。そして恨みを捨てた法然上人が親鸞聖人に与えたのは、不安から来る暴力の連鎖ではなく「光とぬくもり」でした。

幼少期に両親を亡くした親鸞聖人が、渴愛による苦しみを抱えていたことは「誠に知んぬ。悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを恥ずべし、傷むべし」と『教行信証』(信文類)の言葉が物語っています。

親鸞聖人は、ありのままの自己の渴愛を知り、「欲愛」と「生存愛」を自分の中に認める事が出来た人であり、自己愛を克服できた人であると言えるのでは

ないでしょうか。

ジン・M・トウエンギとW・キース・キャンベルは『自己愛過剰社会』(桃井緑美子訳2011年河出書房新社)の中で、自己愛病の治療として仏教の「念」を挙げています。念は自己愛を弱め、エゴを抑え、何事にも穏やかに応える事が出来、家族や職場の争いを少なくすると述べています。

仏教の念とは、念仏のことであり、念仏が暴力の連鎖を断ち切る行であることは、日本人より欧米の心理学者の方がよく知っているようです。

釈尊の言葉に「人は己よりも愛しきものを見出すことを得ない。それと同じように、全て他の人々にも自己はこの上もなく愛しい。されば、己の愛していることを知る者は、他の者を害してはならない」と言い残しています。

真に人を愛する者は、自己愛を知り得ています。だからこそ他者を愛し、人の痛みや苦しみに寄り

添えることが出来、人への復讐、暴力への無意味さに気づくのです。

亡き被害者が仏に成り、私たちの世界に願うことは、二度と人殺しを生まない世界、すなわち「一人として取り残さない世界」を願うのではないのでしょうか。そしてその世界とは、決して恨みを生み続ける世界ではないはずなのです。

親鸞聖人は、「さるべき業縁のもようせば、如何なる振る舞いもすべし」と申されました。

私たち人間は条件次第で、いつでも殺人者にもなりえることを自己に問い続けて生きて往くことが、他人を問い、罰を与えることより、今私達には必要なことなのではないでしょうか。(終わり)

信飯山 西真寺

前住職、前坊守七回忌法要
ならびに住職継職奉告法要

のお知らせ

令和四年六月八日(水)